

「一圓持つて来たんやが、天神さんへお賽錢に上げて、残り九十九錢や」

「どうも仕方がない、さあ狐を取れ」

「嚼めしまへんか」

「大夫丈や、お前が助けて遣ると言ふ心や、なんの嚼むものか」

「さよか、どつこいしよ……、イヤ大きに」

「サア、早う逃がせ」

「買ふたら、買ふた者の物や、逃がそと、逃がそまいと、私の勝手や、是から高津の黒焼屋へ持て行て、三圓に賣るね」

「オイ、そんな無茶な事が有るか」

「嘘や、なんの其んな事を仕ますかいな、直に逃します、チョツと彼方へ行てとくなアれ、さよならア、彼方へ行きよつた、オイ、危い事やつたな、既に黒焼になるとこやが、晝は今日つさんのお照しで、目が見へぬねとなア、子供の餌を拾ひに出たんか、晝は出へなや、モシ餌が慾い時は、私の宅へおいで、高津新地百間長家ガタ／＼裏で、胴籠の保平と聞いたら直ぐ解る、かならず晝は出るなよ、彼んな無茶者に出合ふて、黒焼に仕られんならん、お前に頼みが有るが、聞いて呉れるか、實は昨晚隣のへんちき、嬢を貰ひ依つたんや、私も急に嬢が慾しなつてきたんや、宜い嬢が有つ

たら一人世話を仕て呉れ、宜いか頼んだぞ、願いて居るが解つたアるかいな、それ逃して遣る、そ

ら逃げ、ア、ア、嬉し相に逃げて行き依つた、ア、臭さ、狐と言ふ者は臭ひもんやな……」

「モシ、あんたはん、宜い事を仕なはつたな」

「お婆ん、見て居たか」

「ハイ」

「あの、エツシーシて何處や」

「お前さん、エツシーシやない、一心寺ぢやろうがな」

「お婆ん、そうや」

「この向ひのお寺ぢや」

「大きに、有がとう、お嬢のお世話は無いかいな……」

ぶら／＼と参りますと、藪の中から、今助けて貰ふた狐が飛び出しまして、草を頭に頂せて、後へ返りますと、十八九の綺麗な娘に化けまして、保平の後から

「おゝい／＼」（鳴物しのぶ賣）

「チョツと、保さんの兄さんやおまへんか」（鳴物色めき）

「誰や知らんとと思ふたら、お常ぢやんか」